

剣の四君子

高橋泥舟

吉川英治

青空文庫

熟れた柿うかきが落ちてゐる。何のことから始まつたのか、柿の木の
下で、兄弟は取っ組み合つていた。

小さい謙三けん郎は、手もなく、兄の紀一郎きに投げつけられて、強したた
かに背を大地へ打ちつけた。

「よくも投げたな」

恥辱だと思ふのだ。武士の子だ。転まろびながらも齒はぎし軋りして、兄
の足へしがみつく。

「まだ懲こりぬか」

紀一郎は振り放す。小癩こしやくな弟は、喰い下がって離れない。そしてまた組む。また勢いよく叩きつけられる。

妹の英子ふさこは泣き出して、

「――母かあ様、母あ様」

と、奥へ急を告げる。

書院の破障子やれが開いて、立ち出でたのは、兄弟の母でなくて、父の山岡市郎右衛門であつた。

「また喧嘩けんかかつ。紀一郎、大きなくせに、止めんか。謙三郎、弟の分際ぶんざいで、兄上あにさまに対し、何たることか」

この一喝いっかつで、兄弟は立別れ、やがて半刻とときもお談義だんぎを喰う。母の文字もじが来て詫わびる。おまえの躰しつけが悪いからだと母までも叱言

を聞く。幼い英子^{ふさぎ}までが一緒に泣いて謝^{あやま}りぬく。女の子の可憐^{いじら}しきにはかなわぬといった風で、市郎右衛門は、

「泣くな、もうよい」

と、英子を宥^{なだ}めることに依つて、一先ず母も兄弟も、以後を誠^{いまし}められてやつと許される。

旗本といえは歴^{れつき}乎と聞えるが、幕臣山岡家は微^{びろく}禄だし豊かではなかつた。庭の草も茫々、障子の貼^{はりか}代えも年に一度を二年越しに持たせたりしている。唯、そんな家庭にも絶^{さかん}えず旺な物音がある所^ゆ以^{えん}は、元気な男の子二人のためだった。兄の紀一郎がことし十五弟のなかなかきかない方が、やつと九歳で、通称謙^{けん}三郎、字は寛^{あきな}猛^{たけ}、後に養家の高橋姓に改めて、伊勢守となり、泥^{でいしゆう}舟と号

した人である。

その高橋家は、母の里方の家だった。

二の丸留守居役の高橋義左衛門かねざね包実が、母の父であった。兄弟たちには外祖父にあたる人だ。

そこへ兄弟は、毎日、剣道と槍術の指南をうけに通っている。

高橋家は、累代るいだい、劍、槍、薙刀なぎなたの三法一如を唱えて、幕府の

子弟に教授し、流風は地味であったが、武技そのものより士魂を尊んで、幕末の頽廢たいはいてき的な士風に、復古的な武士道教育を打ちこんでいた。

その祖父であり師である高橋義左衛門が、ふと訪れて、

「ここ此家の兄弟を出してみんか、人前に立たせるのも、修業のひとつ

つじやで」

何の話かして帰った。

父と祖父との対談を小耳にはさんでいた兄弟は、まろい眼を見合せていた。義左衛門が帰って行くと、紀一郎、謙三郎のふたりは呼ばれた。父の市郎右衛門は、二人を見較べて、

「そち達、よう精出して喧嘩するので、明日は、曠あすれて真劍の決戦をさせてやると、義左衛門様のお計はからいじや。明日こそは、兄弟とて、紀一郎も弟に負くるな。謙三郎も兄に負けるなよ」と、云い渡した。

枯れ初め^そた初冬の草床^{くさどこ}が暖い日だった。物頭^{ものがしら}松平六左衛門の邸内に人がたくさん集まった。門脇から幕が張つてある。朝からずっと、鋭い掛声と、竹刀^{しな}、木太刀^{きだち}、稽古槍^{けいこやり}の響きなどが続いている。

年々一回ずつ行われる幕府の旗本の子弟の武技試験であつた。各組^{くみがしら}頭^{つうちょう}に通牒^{つうちょう}してあるので、組頭は当日名簿と人員^{たずさ}を携えて参加する。山岡家の兄弟も、ここへ連れて来られたのであつた。

人の中である。兄弟はおとなしい。ふたり共、好きな道であるのでわき目もせず、飽^あきもせず、朝からずっと、各流各人の入り交^か

わり、立ち交わって戦う試合をながめていた。

判者はんじゃの中には、兄弟の先生でもあり祖父でもある人の顔が見えている。けれど父の市郎右衛門は来ていない。

そのうちに、山岡紀一郎、山岡謙三郎、と名を呼びあげられた。

「はいっ」

「はいっ」

兄弟は一緒に答えて、真ん中へ出た。かいがいしい支度が人目をひいた。

「御記録となって、上様のお耳にまで達するのですぞ。懸命にやりなさい」

世話人は励まして、二人へ同様な稽古けいこ槍やりを供えた。小剣士と

小劍士との礼儀をするのが、人々を微笑ほほえませた。

だが、槍を持ったなと思う瞬間、微笑ましい光景などは消し飛んで、兄弟の掛り合う烈はげしい気声は、朝から続いて情気だきまんまん満々だった大人おとなどもの試合のどれよりも真劍で凄まじくさえあつた。

そのうちに、あツ——と皆が口走つた。弟の謙三郎の小さい体が、砂を浴びる山鳥のように、草くさぼこり埃いにつつまれて、だつと槍もろとも、躍つたと思うと、兄の紀一郎は物すごい勢いで仰向けに突き仆たされていたのだつた。

「——危ないっ」

「もうよいっ」

判者も思わず叫び、世話人も駈け寄つて中を割つた程であつた。

三

紀一郎は、頬を突かれたのである。それから数日、顔半分が樽のように腫れ上がって、寢床から起つこともできなかつた。

「兄さん、痛い。まだ痛い？」

謙三郎は心配そうに、兄の枕元から離れなかつた。

そして兄の顔をさし覗いては、

「ごめんね」

と、云つた。

「……………」

紀一郎は、眼をふさいだまま、何も云わなかつた。余りに何も云つてくれないので、

「怒ってんの？」

謙三郎が云うと、

「……ううん」

首を振つて、兄の紀一郎は、たらりと眼じりから涙を垂らした。そして弟の手をにぎり、

「よくやったね、欣しいよ、兄のくせに、わしの勉強が足らなかつた。体が快よくなつたら、一生懸命、未熟を取返してみせる」

それきり、このふたりの兄弟喧嘩は見られなくなつた。両親には孝行であつた。山岡の孝童こうどうと、模範こうどに云われた。

弟の謙三郎は十七歳となると、高橋家へ養子に貰われて行つた。別れてからの兄弟はなおさら情愛の度を深めるばかりだった。

唯、武道の上に於てだけは、互いに、

「負けないぞ」

との黙契もつけいを固く抱きつづけていた。

わけでも兄の紀一郎は、十五歳の時、顔半分腫はらして七日も寝た時から、深刻な感銘をうけたとみえ、以来心機一転して、その精進ぶりは、両親も体を案じる程だった。

年少、早くも禅に心を潜ひそめ、諸家の門を叩き、工夫を鑽つみ、また、文事にも精励せいれいして、号を静山と称し、その二十四、五歳の頃にはすでに、

「槍では今、山岡静山、天下の第一人者であろう」

と云われ、また、

「怖おそらく、静山のような人物は、百年に一人か二人しか現でない天才というものだろう」

と評されたくらいであつた。

世人は自分らの中から群を抜いた非凡を発見すると、必ずそれを「天才」と呼ぶ。しかし山岡静山の名人といわれるに到つた域は、決して天稟てんびんだけのものではない。むしろ努力であつたのだ。
 頼山陽らいさんようの文名が一世を圧した時、世人はまた、山陽の詩、山陽の文業をさして、

「あれは天才の筆だ」

と云つた。

山陽はそれを聞いて呟いたそうである。

「わしを天才などと観る者は、わしの知己じやない」——と。

人の目になど見えない所に、そう云う人の刻苦と精進はあるの
 だったが、深夜の寒燈の下に、血を咯きながら修史何十年の悲壯
 な努力の姿は、誰も山陽に見ていなかったのである。

静山、山岡紀一郎の上達にも、誰も知らぬ苦行があつた。毎年
 の嚴寒には、深夜、凍天をいただき氷地を踏み、井戸端へ出
 て、荒縄で腹を巻きしめ、氷を砕いた水を頭からかぶつて、丑
 満から独り道場入りを始め、夜の明けるまで、重さ十五斤の槍
 を揮つて突の猛練習をなし、一夜一千回から二千回に及び、それ

を三十夜も続けたという。

一家をなして、当代一流といわれてからでも、昼は何百の門人に当り、夜は必ずその「突」^{つぎ}の練習を怠らなかつた。少しくらいな風邪^{かぜ}や病氣などは、三千回も「突」をやれば癒^{なお}ると自分で云つていた。宵の灯ともし頃から翌朝の禽^{とり}の音の聞えるまで、二万何千回という「突」を数えたことすらあつた。

「近代めずらしい武道家」

噂を伝え聞いて、或る時、訪ねて来た一人物がある。筑後柳^{ちくごやなが}河^わの人で南紀理介^{なんきりすけ}、槍術では海内^{かいだい}無双^{むそう}という聞えがあつた。

初対面の時は、武談だけして別れた。

「さすがだな」

お互いにその人間だけを観て別れたのである。

一月程後、南紀理介は、

「帰国するのでお別れに」

と、挨拶に來た。

そして国のみやげに、静山の槍を見たいと乞うた。

静山も、理介の槍を見たいと思つていたところである。人を払つて、ただ二人、神しんごん巖なる床に立つた。

壮烈を極めた名人同士の試合は、古來からの試合の記録を破つた。朝の九時前後から立合つて、午過ぎひるの四時頃になつてもまだ勝負がつかかなかつたのである。熔ようこうろ鋳炉中の鉄と焰ほのおのごとく心魂を凝こらし合つたので板敷は二人の汗ですべ濡るばかりであつた。引分けひきわ

として、双方の槍を、後で眺めあうと、穂先はくだけで、何寸もささらのように欠け減っていたという。

四

父の市郎右衛門は早く世を去った。母の文子は多病であつた。静山の書齋の壁には、

七の日墓参

三八聴ちようこう講

一六母のあんま

と書いて貼はつてあつた。

母の按摩あんまをしたり、書齋で書物に向っている間などは、短い木刀を一腰さしているだけであつた。木刀の一面には、

——人の短をいわず、己れの長を不説とかず

と刻し、裏の一面には、

——人に施ほどこして念とす勿なかねどこし、施をうけて忘る勿なかれ

と自刻の銘めいを彫ほつていた。

そして、門下には常に、

「怖いのは驕きようまん 慢だ。増長だ。心にいささかでも、驕きようごう 傲ごうの

ヒビが入れば、百年鍛錬の道業も一朝に崩廢し去る」

と云つていた。

弟の謙三郎の養子先でありまた、師にも外祖父にもあたる高橋

義左衛門は、ようやく老齡になつたので、師範にたえず、弟子とその道場とを挙げて、

「後事をたのむ」

と、静山に譲つて隠居した。

それからは、高橋謙三郎も、親しく兄の静山について、槍法の教えをうけていた。

この頃、やはり静山の所へ、よく武道をただしに来る真面目な青年があつた。後の山岡鉄舟であつた。

母の亡ない後は、静山の妹の英子ひこも一つ棟に来ていた。英子は、やがて鉄舟の夫人となつた女性である。その頃から道場でよく顔は見合せたが、お互いの生涯をどっちもまだ予感していなかつた。

この一家には、ただ武道の光あるばかりだった。

何といつても静山が柱だった。

弟の養祖父に仕えては飽くまで礼と誠に篤く、亡き父母には孝養の限りを尽したし、弟妹には情けぶかくて優しかった。知己友人、誰ひとり静山にそむ反く者はない。実によく人に慕われる人だった。

しかもまだ武道家としては、若輩といつてよい年齢のうちから、当代無双といわれ、槍では名人とゆるさされている。そうした風格が余りにも若くから備わり過ぎていたのも、後に思えば、短命な花の早咲きであったのか、安政二年の夏七月、実に、余りにも飽あつ気なく、静山は夭折ようせつしてしまったのであった。

その死もまた、彼らしい、義のためではあつたが。

「ああ、^{はかな}儂い！」

と人をして、^{さたん}嗟嘆を久しゆうせしめるような突然の死であつた。

夏の初め頃から静山は、脚気を病んでいたが、七月の暑い日盛り頃、自分の水泳の師たる人が、何か恨みをうけている者のために、品川沖の水練場で、相手に謀^{はか}られて危難に墜^{おと}し入れられようとしていと病床で聞いたので、

「一大事」

と、自分の重態もわすれて、炎天を馳けつけ、その人を救うために沖へ泳いだので、脚^{かつけし}氣衝^{しょうしん}心を起して途中でことぎれてしまったのである。

静山は、年二十七。

残された高橋謙三郎は二十一歳であつた。

五

養家の父高橋れんのすけ鍾之助は、それより数年前に死亡していたし、生家の母もつづいて逝ゆくし、またその年の春には、養祖父の義左衛門も病歿し、今またつづいて、実兄の山岡静山に死別れたのである。

何たる不幸つづきか。二十一歳の謙三郎は、途方に暮れた。

「これからは、あなたがここの柱になるのではないか。貴公がそ

んなに嘆いてばかりいては、お妹の英ふせさんも、どうしてよいか分るまい。お察しはするが、気を取り直し給え、もつと元気に」

兄の友であり弟子であつた山岡鉄舟から、こう励まされて、
「そうだ、いや、お恥かしい」

謙三郎も、すぐ気づいた。そして一心不乱、道場に立つて、一槍に心胆を凝こらすことを以て、独り淋しさを慰めていた。

けれど余りにも、優しかった兄、弟思いな兄、また力と恃たのんでいた兄に、突とつこつ忽と、現うづし世の姿を眼の前から搔かきけ消されてしまったので、多感な謙三郎は、

「兄恋し」

の想いを、どうしても、脳裡から拭き去ることができなかつた。

槍を持てば、槍を持つ兄の姿が憶い出され、飯を噛めば、共に膳をかこむ兄の姿や言葉がありありと偲び出される。飯を噛み噛み茶碗の中へ、われ知らず涙をながしているのに、はつと気がつけば、さし向っていた妹の英子ふさも、わつと箸はしをおいて泣き出すよ
うなことも屢 《しばしば》であつた。

「ああ、だめだ。兄の偉大が、今わかつた。兄の愛情が、骨身にこたえる。生き残つて、この任を負い通せるわしではない。お慕なつかしい兄上の許もとへ行つて」

ふつと、彼はそんな氣になつた。仏間を閉じて、腹を切ろうと
していたのである。

「——あれツ、お兄様つ」

ふと見つけて、仰天した英子は、悲鳴に似た声で、人々を呼び立てた。

来合せていた山岡鉄太郎も、駈けつけて来て、

「ばかなっ」

と叱りながら、謙三郎の手から白刃を挽ぎ取った。

謙三郎は打伏して、人前もなく声をあげて慟哭した。人々は一時、彼は発狂したのではないかとすら疑った。

六

忍齋にんさいと号し、または泥舟でいしゆうとも称したのは、ずっと彼の晩

年ではあるが、便宜上、以下高橋謙三郎を単に泥舟で記してゆく。二十一歳で養家の支柱となった泥舟に取つて、唯一の心友は、何といつても亡兄の門友小野鉄太郎であつた。

鉄太郎の実家は、泥舟の生家山岡家よりも、遙かに家格もよい家であつたが、泥舟は養家の姓をつぎ、兄紀一郎は世を去つて、山岡家の跡目もここに絶えんとしているのを知ると、

「自分で宜しければ、山岡家の相続人となつてもよい」

と、捨て難い事情にあつた小野家の跡目を他へ譲つて、山岡姓を名乗る人となつてくれたのだつた。

それもこれも、悲愁の裡に沈んでいる泥舟を励ますためであつた。実際、泥舟に取つては、それも一つの悩みであつたのであ

る。

英子ふさぎは、鉄太郎と結婚した。鉄太郎と泥舟とは、こうして義弟の間となった。鉄太郎も以後は鉄舟と記してゆこう。

「聞けば貴公は、まだ九歳の頃、十五歳の兄紀一郎殿を、一撃に突き負かしたというではないか。そうした勇猛心のある貴公が、近頃は何たる女々しさだ。これしきの悲嘆、これしきの逆境に負けてどう召さる。門人に対してだツて見つともない」

義の兄弟となると、鉄舟はなおさら、齒きぬに衣着きぬせずけ言つた。泥舟も励まされては道場へ出て門人に接した。当時その門には、松岡万、関口隆吉たかよし、大草多喜次郎、中条金之助そなどの錚そう々たる人々が集まっていた。

安政二年の暮に幕府は、泥舟を勘定奉行下の一会計吏に任命したが、翌年はすぐ、適材でないとして、幕府講武所の槍術教授を申し付けた。また將軍直属の親衛軍の内へも加えた。

多忙になつた。愁^{うれ}える間もない体になつた。けれど性来の多感と情熱は彼を去つたわけでない。人にこそ云われないが彼の胸中にはたえず亡き兄の静山に対する恋々な慕情が熄^やむべくもなかつた。安政の四年、泥舟が明けて二十三歳となつた年の二月^{きさらぎ}の一夜だつた。

「謙三郎。——謙三郎っ」

誰か彼を呼び起す者があつた。

はつと頭^{こゝべ}を上げてみると、兄の静山が立っている。水のように

立っているのだ。じつと自分を見ている容子は、在りし日の静山よゆうすと少しも変りはない。

「……おっ。兄上」

「弟。どうだ」

「………」

「そちの槍術は上達したか。槍の名家の跡目を嗣いで、嗤わらわるるようなことはあるまいな。兄も日ごとのそちの努力はよそながら観てはおるが」

「………?」

「わしも現世を去つてより正に三年、生を天上界にうけて靈福極まりないが、なお、憶念そちの身を案じ、愛恋じょうの情をどうしよう

もないのはお前とも同じことである。どうだ、近頃の修業は、また心機しんきの妙を得たか」

「……？」

「起てよ、謙三郎。別離三年、どれ程にそちが進歩しておるか。兄が試みてやる。はや身支度して道場に出よ」

茫然——うつつ現か夢かとそれまで聞いていた泥舟は、さては日頃、

自分が余りに兄を恋い慕うので、心の煩ほんのう悩なやみにつけ入って、狐狸こりか物の怪けが、亡き兄の姿をかりて誑たぶらかしに來たなど覺えたので、

「だまれつ、変化へんげ、愚おろかな狐伎こぎを演じておると、一刀もとの下に斬捨ざんせてるぞつ」

すると、水の如き、静山の姿は、

「弟よ。道理である。この兄の現影を、狐狸のしわざと疑うもむりではない。しかし、理外の理のあるをそちは知るまい。死後生あり、生後死あり、人間のこのほう一魂は、生々死々輪りんてん輾てんして極まりのないものなのだ。もし此方このほうが狐狸しろうの性ならば、お前のほこし鋒先に当るべくもない。そちもよもや変化に劣るが如き脆ぜい弱じやくな腕は持つまい。いざ、試合おうつ。——試みに当つて参るがよい」

静山は、そういうと、音もなく、道場の方へ足を運んでゆく様子であった。

「……おのれっ」

泥舟は、夢中で匆起はねおきでいた。

そして道場へ躍り立った。

冱寒ごかんの大床おおゆかは氷を張つめたようである。泥舟はりゆうと一颯さつ氷氣を裂さいて相手の影へ迫った。

——うむッ。

巖いわの揺ゆるぐような呼吸が泥舟を圧した。はっと繰引くりけば、かえつて相手の槍こそ泥舟の胸いたへ真一文字に来ていたのである。だ、だ、だかかとッかかとと踵を鳴らして踏み止まる。爛らんと眸ひとみの霞かすみを払つて敵を見澄あます。

「……ああ、兄だつ。兄上だつ」

もう泥舟は疑わなかつた。兄静山に非ざれば見得ない長槍の神技の構えを、彼は幾年いくとせぶりかでその眼に見ていたのである。

——と憶うた瞬間である。泥舟はいきなり横顔を持って行かれたような痺れしびを覚えた。あつと、叫んだ時は勢いよく仰向けにもんどり打っていたのである。我れを突つきたお仆した稽古槍の先は、せつな、火の出るように覚えた眼の上をさつと翻かえり、道場の隅へすぐ投げ捨てられた音が、からからと聞えた。

「未熟、未熟。思うにそちはまだ業を蔵し、心開しんけず、手頭滅離めつり、たとえば徒いたずらに騒いで風にも咲かず散らざる半開の花にも似る。わしはまた、明夜来よう。——おさらば」

静山の言い残して行く声なのである。

「あなや！」

泥舟は手をあげた。兄の名を呼んだ。枕から顛動して落ちた。夢は、忽然と、醒めたのであった。

「……………」

満身の汗は、寝衣を湿おしていた。破戸の隙間洩る白い光は如月の暁に近い残月であつた。

「ふしぎ？ ふしぎ？ ……」

解けぬ謎に髪の毛はそそけ立っている。しかも、兄静山の一語一句、その音声までも、ありありと耳に残っている。われとも知らず泥舟の頬には、滂沱たる涙が止まらなかつたのである。

次の夜も、彼は、同じふしぎを体験した。弟よ、約束によって

来りしぞ、はや道場に出よ。と静山は呼ぶのであった。

「おおつ」

と泥舟はもう何の遲疑ちぎもなく道場へ出た。

「兄と思うなつ。汝の敵と思え！」

静山は峻しゅん烈れつであつた。しかも昨夜以上、強したたかに泥舟は突き

負かされた。

「起てつ。立ち直つて来い」

静山は云う。そして猛烈な刺撃しげきに次ぐ刺撃を以て、泥舟の息も

塞ふさぐばかりだつた。

何遍、大床にぶつ仆れたか。果はては起ちも得ず、氣息えんえん奄々と

なると、

「意気地のない！」と叱咤しったして、静山は怒り罵のるが如き形相を示した。

「少年九歳の頃の精しょうこん魂は失ったのか。われも人間の精魂ぞ。汝も人間の精魂ぞ。如何いかなればかくの如き腕の差があるのかを考えて見たか。——明日の夜こそは、十本勝負をしよう」

云うかと思えば、搔消かききえるように、静山の姿はもう見えない。

終日、朦朧もうろうとした面持で、泥舟はうつつに次の一日を過した。そして深夜となると、頭は冴えて寝つかれもしなかった。一念、工夫苦心していたのだった。そしてそのまま、昏々こんこんと夢現むげんの境にはいった頃、兄の姿はまた、前の夜と変りなく、彼の眼に見えた。

道場へ出て、礼を交わし、槍を把り合うと、静山は、こよいは約束どおり十本勝負であるぞと云つて、前の二夜にもまさる程、
かしゃく 仮借ないはげ 烈しきで立ちむか 対つて来た。

槍が軽い——。どうしたのか、泥舟は、その夜に限つて、心は開け、手足心息、まったく一つに動くのであつた。

十本勝負のうち、九本まで、泥舟が勝つた。

「あと一勝」

と、さらに気負いかかると、静山は槍を捨てて、その夜初めて、
にこ 莞爾と笑い顔を見せた。

「弟よ。もうよい」

「え……?」

「天授の槍法を感得かんとくしたのだ。これでわしも初めて安心した。

さらば、永く別れねばならぬ。命めいを愛し、国に報ぜよ」

沁しんみりと云う。じつと泥舟を見つめる。そして裳もを曳く人の如く、遅々と、名残惜しそうに、道場の裏戸から静山は戸外おもてへ立ち去る——

「あつ、あつ、兄上つ……」

泥舟は躑よろぼうた。追えば去り追えば去り、寄せつけぬ兄の影を追つては叫んだ。

「まつ、待つて下さい……」

彼はいつか大地を馳たけていた。慥たしかに彼の足の皮膚は凍いてた地の霜に破られて血をにじませている。とはいえ、家の何処の口から

出て来たか、垣を越えてか、門を開けてか、それはまったく覚え
ないのである。

「兄上つ。兄上つ……」

唯、何度か呼び、何度か残月に哭ないた。道は白々と、人影もな
い。有るのは、先に行くかのような静山の影と、自分の惨さんたる姿
だけだった。

気がついて見ると——彼はいつか一箇の墓石の前に坐っている
自分を見出したのである。見まわせば、そこは覚えのある山岡家
の菩提寺駒込蓮華寺れんげじの墓地であつた。卒塔婆そとうばの文字、——清勝院
殿法授静山居士——と読み下すと共に、彼は、そこまで追つて来
た慕わしい恋しい兄が、何ものであつたかはつきり覚さとつた。一塊

の土塊どかいに寄せるべく余りに彼の情涙は熱かった。土を抱いて泣き伏したまま、

「もう一度。……もう一度お姿を」

と、凡愚ぼんぐの子の極かぎりもなく訴えた。

残月は冷やかに、彼の乱るる鬢びんぼつ髪の一すじ一すじを照らして

いた。霜は彼の涙に溶けても、土は物云わず、風も答えない。泥

舟は、何かふツと、人間の儂はかなさ、無常觀むじょうかんといったようなものに

囚とらわれたらしい。いやひたむきな性情は、遂に、地下の兄の魂こんば

魄くをもって抱きつかなければ熄やまない衝動に駆られたものとみ

える。やにわに、諸肌もろはだを脱ぎ、脇差を引き抜くよと見えたが、

「ゆるして下さい。兄上、わたくしも」

脾腹ひばらへ突き立てようとした。

それより前に、高橋家の人々は、

(ゆうべも、おとといも?)

と怪しんでいた折ふし、こよいまた、泥舟が狂せる如く、何処へともなく走り出て行つたので、ちようど泊り合せていた妹の英ふさぎ子、山岡鉄舟、下僕や門人など七、八名して、闇夜ではないが町方などへの証あかしのため、提ちようちん灯を打振りながら、

「おおうい。待てえつ。おーい」

「謙三郎どのう」

「お兄様あつ……」

後追いかけて来たのだった。

けれど泥舟の足の早さは驚くばかりであつたし、それほど人々が呼ぶ懸命な声も耳に届かないのか、振向きもせず、蓮華寺の寺域へ駆け込んでしまつたのであつた。

「そこか。——此方こちらか？」

と、手分して尋ねて来ると、今し泥舟は割かつぶく腹しようとしている態なので、あつと、人々は仰天して左右から彼の身へ飛びついた。

八

昏々と眠り落ちていること数日、泥舟はやつと起きた。

起き出た彼には、以前と何の変りも見られなかった。

だが、その日。

「久しぶりに」

と、道場で彼と槍を合せた鉄舟は、殆ど、啞然たるばかりな驚きに打たれた。

「別人のようだ！」

と、鉄舟は唸うめいた。

「もう、自分などの寄りつける御身の技わざではない。一体、これはどうしたことか」

と云つて、いぶかしそうに訊ねた。

実に、泥舟の槍術は、その時から、自己も人も驚くほど、格段

な進境を現わしたのであつた。——どうしてと、鉄舟に問われても、泥舟自身にも分らなかつた。

しかし、或る会心は、胸にあつた。けれどそれは怪力乱神を語るに似て、人には語れないものであつた。だから泥舟は黙然——
「ふうむ、そうかな。道理で、自分でも少しこの頃は、槍がうごくようになったと覚える」

としか云わなかつた。

けれど彼は遂に語らずにいられなかつた。兄静山に対する切々な思慕は老いてまでも胸の埋め火うずとなつていた。晩年、彼は多くの詩をつくり和歌随筆などを物しているが、その一著「泥舟遺言いげん」のうちに、以上の事は彼自ら記していることなのである。

古来よく伝えらるる「夢想の劍」なるものがある。人間の心情と一念の凝こるところに往々理外の理なる神示、靈感、夢想などがあつた。奇蹟はこれを解き得れば奇蹟でも何でもないのである。劍では男谷下総守おだにしもうさのかみ、槍では高橋と並び称されて、幕末の劍雄中に、彼の槍法が断然異彩をもつて他の追つ随いをゆるさなかつたのも、実に、彼自身が正直に「泥舟遺言」に云つている如く、夢中の掴かく得とくであり、一苦惱期を脱だつ殻かくした日からであつた。

だが、凡夢は常に枕を襲うが、神夢はただ枕辺には下りて来ない。ましてや苦惱の殻からは、鶏かえが孵かえるがごとく、自ひとりでは割れない。

力である。悩み、迷い、愛、熱、どんな力でもよい。神とおに徹とおる

までの力であればよい。

青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「講談倶楽部 二月号」大日本雄弁会講談社

1940（昭和15）年2月

※初出時の表題は「日本剣人伝（二）高橋泥舟」です。

入力：川山隆

校正：岡村和彦

2014年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

剣の四君子

高橋泥舟

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>